

ユーザ事例

中央大学

全学認証基盤を構築し、認証統合を段階的に展開 学部の垣根を越えたID管理でさらなる利便性向上を目指す

2003年度にFLP（ファカルティリンケージプログラム）をスタートし、学部の枠を越えた教育を推進している中央大学。ここでは学部の垣根を越えたシステム活用を推進するため、全学共通の統合認証基盤が導入されている。その中核には「LDAP Manager」を採用、プラットフォームにはブレードサーバと仮想化技術が活用されている。シンプルかつオープン、高い柔軟性を実現することで、運用管理負担を軽減しているのだ。また統合を段階的に進めている点も注目すべきポイント。各システムの運用者と時間をかけて調整を行うことで、無理のない統合が実現されている。

学部毎に分かれたユーザ認証 その煩雑さがFLP導入で顕在化

個別の認証システムを持つ複数システムの管理負担を、いかにして削減していくか。このような悩みを抱えている組織は決して少なくない。複数の認証システムをそのまま運用し続ければ、ユーザは複数のユーザIDとパスワードを使い分ける必要があり、日々のシステム活用が煩雑になる。そのため、憶えやすいパスワードを選んできたり、定期的なパスワード変更を怠る、といった問題を招きやすくなり、結果的にセキュリティを悪化させることになる。またシステム運用者側の負担も必要以上に大きくなる。ユーザの追加や変更に伴い、複数のアカウント設定に手を入れる必要があるからだ。

このような問題を、ネットマークスが提案した統合認証システムによって解決しているのが中央大学である。同大学は1885年に英吉利法律学校として設立され、1905年に中央大学へと改称、法曹界や官界に多くの卒業生を送り出してきた。現在は多摩、後楽園、市ヶ谷にキャンパスを展開。6学部、大学院7研究科、専門職大学院3研究科、9研究所、附属高等学校3校を擁する総合大学となっている。

「総合大学ならではの有機的な教育を行うため、2003年度からはFLP（ファカルティリンケージプログラム）もスタートしています」というのは、中央大学 情報環境整備センター事務部長の一ノ瀬 秀士氏。FLPとは“所属学部で主専攻の課程を修める”という基本的な枠組みを維持しつつ、学部の枠を越えた知的領域も系統的・体系的に学修するプログラム。これによって学際的な発想と、問題解決

能力の向上を目指しているのだと説明する。「しかし学内の情報システムは学部毎・部署毎に構築されており、ユーザ認証も個別に行われていました。そのため学部の枠を越えた活動が広がるに伴い、使い勝手に問題が生じるようになったのです」

例えば教職員の場合、メールシステムや研究用共用Webサーバ、研究報告用サーバ等のシステムを使用しているが、これらの認証システムは個別に構築されており、複数のアカウントを使い分ける必要があった。複数学部を兼任する教職員では、アカウントを10個以上持っている人も珍しくなかったという。

数多くのソリューションの中から シンプルでオープンなものを選択

このような問題を解決するため、学内の情報環境整備委員会の中に、小委員会を設置し、統合認証実現に向けた検証を開始。ここで真っ先に行われたのが、最終目標の明確化だった。プロジェクトの複雑化・肥大化を回避するため、検討の焦点が絞り込まれたのである。これと並行して複数ベンダに提案を依頼、利用可能なソリューションの調査も進められていった。

「技術的に最も重要な要件は、現状の人員の枠で運用可能なことでした」というのは、中央大学 情報環境整備センター事務部長 担当課長の石倉 孝一氏。そのためにはできるだけシンプルなものが求められたという。また既存の認証メカニズムを統合認証に取り込んでいくため、オープンテクノロジーの採用も重視された。これらの条件をもとに、数多くのソリューションを比較検討。最終的に設計・構築ベンダとし



中央大学
情報環境整備センター事務部長
一ノ瀬 秀士氏



中央大学
情報環境整備センター事務部長
担当課長
石倉 孝一氏



中央大学
情報環境整備センター事務部長
多摩ITセンター事務課
山中 宏和氏

ユーザ紹介

行動する知性。

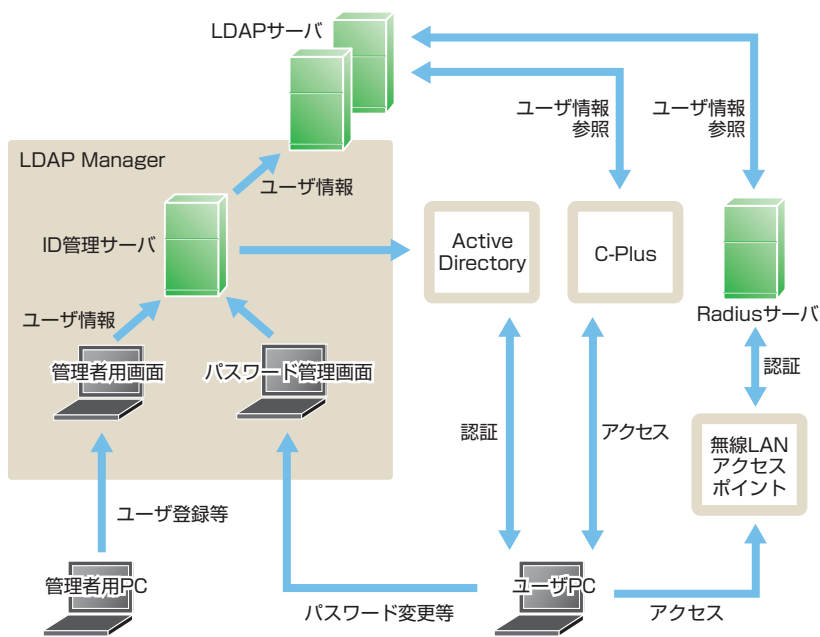


中央大学

<http://www.chuo-u.ac.jp/>




1885年に英吉利法律学校として設立され、1905年に中央大学へと改称、法曹界や官界に多くの卒業生を送り出してきた。現在は多摩、後楽園、市ヶ谷にキャンパスを展開。6学部、大学院7研究科、専門職大学院3研究科、9研究所、附属高等学校3校を擁する総合大学となっている。また2003年度にはFLP（ファカルティリンケージプログラム）もスタート。主専攻の課程だけではなく、学部の枠を越えた知的領域の系統的・体系的な学修によって、学際的な発想と問題解決能力の向上を目指している。



てネットマークスに決定された。

この決定の後最初に実施されたのが、統合認証のプロトタイプ構築と、その稼働検証だった。統合認証基盤を利用するシステムとしては、新たに無線LAN環境を敷設。約半年間にわたる検証を行った後、2008年11月にはこの無線LAN環境が正式リリースされている。中央大学ではこれまでも学部毎の無線LAN環境が構築されていたが、この環境がリリースされることで、統合アカウントでの無線LAN利用が可能になったのである。

次に行われたのが大学生向け教務システム「C-Plus」への適用だ。C-Plusとは学生の成績管理等の機能を持つ、約2万5000ユーザを擁するシステム。これが2008年12月に統合認証環境へと切り替えられたのである。この他にも現在までに、一部のPC教室におけるActive Directory環境の統合等が実現されている。

LDAP Managerで情報を集中管理 ユーザへの窓口も一本化可能に

統合認証環境のメカニズムは図に示す通り。ユーザ情報の登録やパスワード変更などは「ID管理サーバ」で管理されており、ここからLDAPサーバとActive Directoryにユーザ情報が伝達される。ユーザPCがWindowsドメインに参加する場合にはActive Directoryで認証が行われ、C-Plusでの認証はLDAPサーバの情報が利用される。また統合認証対応の無線LANアクセスポイントにアクセスした場合には、RADIUSサーバがLDAPサーバの情報を使用して認証処理を実行する。

「このような形の認証メカニズムが実現したことで、ユーザに対する窓口の一本化が可能になりました」というのは、中央大学 情報環境整備センター事務部長 多摩ITセンター事務課の山中 宏和氏。これによってユーザ登録やパスワード忘れへの対応が迅速

になり、ユーザに関する情報も把握しやすくなったという。「現在はまだ統合認証に参加していないシステムも多いのですが、参加システムが多くなればユーザが使用するパスワードはさらに少なくなり、管理も容易になると思います」

その一方で石倉氏は「統合認証を推進することで、教職員や学生の意識が変わっていくことも大きなメリット」だと指摘する。学部間のシステムの垣根がなくなっていくことで、人々の発想も学部レベルから全学レベルへと拡大していくというのだ。一ノ瀬氏も「全学的な発想が広がればFLPの効果も高まるでしょう」という。

今回のシステム導入では、ブレードサーバと仮想化技術が採用されている点も見逃せないポイントだ。これによってサーバ運用が容易になり、負荷増大時の対応もサービスを止めることなく行えるようになった。また同一構成のシステムが各キャンパス（3拠点）に設置されている点も大きな特長だといえる。ひとつのキャンパスで統合認証システムがダウンしても、他のキャンパスのシステムがリアルタイムで認証サービスを代替できるのである。

現在も進む統合への調整 段階的な取り組みが成功の鍵

2009年度末までには研究者情報システムや、法学部・経済学部・商学部のPC教室も統合認証に参加する予定。またその他のシステムについても統合認証参加に向けた調整が進んでいるという。

「大学のような環境ではシステム統合を一気に行うことは困難です」と一ノ瀬氏。複数のシステムが異なる管理者の元で運用されているため、相手と調整しながら時間をかけて統合を進めるしかないという。今回導入した統合認証システムは、このような“段階的な統合”を進めやすいことも高く評価されている。「まずは統合のベースが存在することを皆さんに意識していただくことが大切です。たとえ少しずつでも統合認証が広がっていけば、いいシステムになっていくはずですよ」

個別に構築された認証メカニズムを統合することは、決して困難ではない。適切なツールを活用し、段階的に調整を進めていけば、無理なく統合することが可能なのだ。中央大学の事例はこのことを、明確に示しているといえるだろう。

● 問い合わせ先



NETMARKS
ネットマークス

[URL] <http://www.netmarks.co.jp>

株式会社ネットマークス マーケットコミュニケーション部
〒135-8560 東京都江東区豊洲1-1-1
TEL.03-5144-1110 FAX.03-6866-4311
E-mail:info@netmarks.co.jp